

コミュニケーション英語での国際理解教育実践

—ルワンダとザンビアにおける日本の国際支援の考察 教師海外派遣研修に参加して—

陣野 俊彦（東京都立練馬高等学校）

1 はじめに

学生時代にマレーシアでのワークキャンプに参加をした。恵まれない子供たちと村で仕事をしながら共同生活を送るものであった。その時に感じたことは、自ら国際協力の現場に近づかないと問題も近づいてこない。そして自ら近づき、経験したことは自分の糧となり、その後も自分ができる国際協力とは何かと考え続けることができる。以上のことを学んだ。しかし、同時に帰国日に新宿で会ったホームレスの人には自ら支援をしたいとは思わないことに気がついた。「マレーシアの子どもは助けるけれども、日本のおじさんは助けない。」ジレンマに苦しんだ。

教員になってからは、生物多様性がテーマの授業では、マレーシアでボランティアをした経験を話した。ボルネオ島のパーム油の問題の話をした。昨年度はグローバルユースキャンプ教員研修に参加をし、国際理解の授業とは何かを初めて経験をした。そして昨年、教師海外派遣研修（ザンビア）に参加をした。率直に言って、参加前は国際理解の授業とは何かを全く理解していなかった。授業で必要であるから参加をするのではなく、参加をしてどう授業に還元するかの流れになっていた。しかし、研修に参加をし、既存の知識・経験を別の視点で捉えて、生徒に伝えようと思の転換をすることができた。

渡航前に明治大学教育会の小島秀治先生から教育会での発表のお声をかけていただいた。その際に「国際理解教育とは何か」との以前からの疑問に挑戦しようと思った。本紀要では、教師海外派遣研修、その後の授業実践を通じて、テーマにアプローチをする。

2 仮説

先行研究として、『高校生を対象とした国際理解教育における評価規準 の開発的研究 — 鹿児島純心女子高校版国際理解 授業評価規準尺度の作成 — (假屋園ほか, 2008)』に注目する。

国際理解および異文化体験に関する研究を概観してみると、その内容から以下のよう分類することができる。第一に日本への留学生を対象とした研究があげられる。これらの研究で代表的な内容は、日本に留学している外国人が日本社会を理解し、日本社会に適応していく過程(たとえば岡崎, 1992; 徐, 1994; 井上・伊藤 1997; 早矢, 1997), 日本留学からの帰国留学生の日本に対するイメージ(徐, 1996), 日本留学に対する評価(萩原, 1991) といったものである。

第二に異文化接触体験を分析した研究がある。これらは日本人が留学生をとおして外国文化に接触した場合(田中, 1997), 在日外国人が日本人や日本文化と接触した場

合(中村ほか, 1994) とに分けることができる。第三に, 自己理解のあり方に対する文化的影響(木内, 1996; 高田 1999) に関する研究があげられる。第四に, 帰国子女教育のあり方に関する研究があげられる(中西, 1988; 坂田, 1992)。これらの研究の特徴としては以下の諸点を指摘することができる。まず研究対象者が, 日本への留学生, 在日外国人, あるいは留学生と接触した学生, 帰国子女に限られていることである。つまり通常の児童生徒は含まれていないのである。

以上のように生まれてからずっと日本で暮らしてきた生徒に対しての, 国際理解教育研究は少ない。さらに鹿児島純心女子高校はスーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクールであり, もともと国際理解に興味を持つ生徒が多い。しかし筆者が勤める, 練馬高校は普通科で, 部活動や通学の近さで入学する生徒が多く, 英語を苦手とする生徒も多い。全日制普通科の都立高校での国際理解教育実践例として, 前例も少ないはずである。

本紀要では, 国際理解教育の実践が達成されたことの尺度を, 「国際協力とは何か言葉にしてできるだけ多く表現できる」と定めて, 研究を進めていく。

3 方法

科目： コミュニケーション英語Ⅱ
対象： 高等学校 2年3・4組習熟度別クラス上位クラス 14名
期間： 2017年9月5日～11月14日
授業時間： 全12時間
対象授業： 『GroveⅡ』 Lesson 8 Paper Buildings (文英堂)
教師派遣海外研修授業

授業実践前にA4の白紙の真ん中に「国際協力」と書き, それに関連した語をマインドマップの形で生徒に記述させた。その語をカウントし, 授業実践後にも同様のことをさせ, 授業実践前後のマインドマップのワード数を比較した。

そのため国際協力について生徒の中に言葉として残る授業実践を心掛けた。まず初めに教師派遣海外研修テーマの1つでもあった, SDGs (Sustainable Development Goals) をパワーポイントのスライドで何度か提示をした。SDGsとは外務省のホームページによると, 『持続可能な開発目標, 2001年に策定されたミレニアム開発目標(MDGs)の後継として, 2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にて記載された2016年から2030年までの国際目標です。持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットから構成され, 地球上の誰一人として取り残さない(leave no one behind)ことを誓っています。[外務省]』とある。

ところでLesson 8では以下のことを学習させた。東日本大震災以来多くの建築家が活躍している。被災した人の住居スペースの提供, 新たな町づくりなど, 復興に向けて様々な提案がなされてきた。坂茂氏もその一人である。坂氏は1994年のルワンダ内戦, 1995年の

阪神淡路大震災から支援をしてきた。その中で建築素材として紙の筒、「紙管（しかん）」を用い、避難所や紙の教会を建設した。建築家として、社会貢献や国際協力に生きる使命感の理解を主眼とした。

SDGsの11番目のゴールに「住み続けられる町作りを」とあり、本課とSDGsのつながりを意識させ、教科書の中に国際的な視点があることに気づかせた。課は4つのパートで構成され、以下の図のように坂氏が紙管で国際協力をした経験が、震災で日本の役にたったことに着目させた（図1：授業実践図、国際協力のCycle ①）。さらに教師海外派遣研修での学びを次のように活かした。一昨年代々木公園での蚊の出現の例を通し、アフリカでの感染症が日本にも広がる可能性があることを想起させた。そこで地球は狭くなっていることに気づかせた。さらに北海道大学とザンビア大学での感染症の共同研究は、最初は北海道大学からの支援の感が強かった。しかし近年は、ザンビア大学でエボラ出血熱検査キットが開発された。坂氏の支援の例との共通点を比較し、「他の国のために支援したことは、自国のためになる。国際協力とは、共に力を合わせることである。」以上のように国際協力の意義を考えさせ、本課のまとめとした（図1：授業実践図、国際協力のCycle ②）。その後、生徒に実践前と同じマインドマップを作らせ、ワード数の比較をした。

1-2	坂茂(ばんしげる)のPaper tubes	SDGsの紹介
3-4	Part 1 Paper tubes	
5-6	Part 2 Civil war in Rwanda	
7-8	Part 3 他の災害現場での支援	
9-10	Part 4 阪神大震災支援活動	
11	坂茂がした国際協力の意義, ザンビアでの日本の途上国支援(人獣共通感染症プロジェクト)	

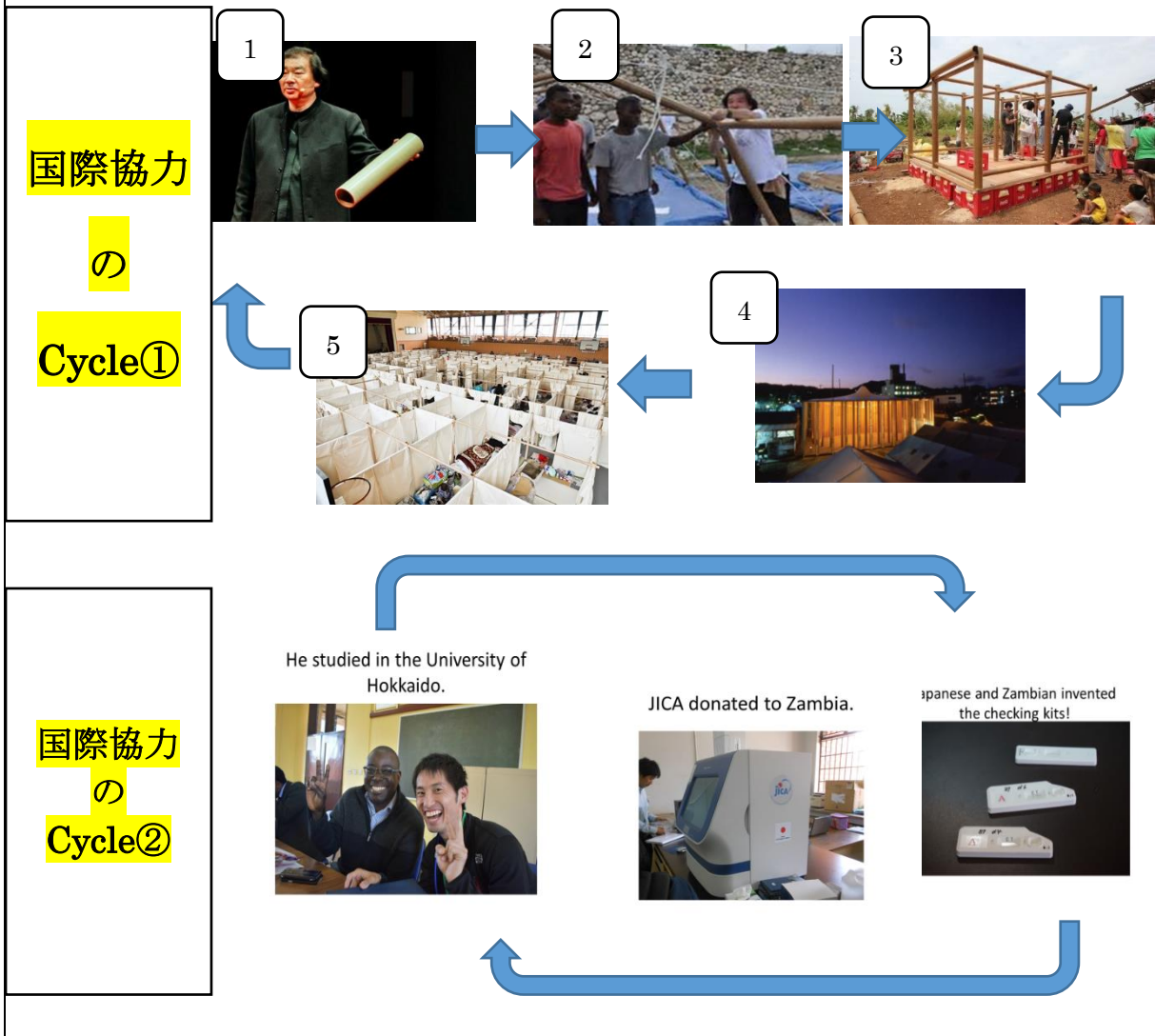
4 結果

縦軸が単語数、横軸が14名の生徒（ $a \sim n$ ）である。（表1）表は筆者が作成した。結果は、単語数は1人平均1.6個増加し、14名全員では総計40単語から63単語と23語の増加が見られた。仮に単語数の増加をもって、目的の達成度を測るのならば、一定の成果が出たと考えることができる。

次に単語の内容を比較をする。授業実践前は「ボランティア、寄付、募金、ユニセフ、井戸を掘る」など国際協力と聞いて想像する、典型的な言葉が目立った。また無記入の生徒もいた。しかし授業実践後は「理解しようとする気持ち、お互いに助け合う、not one way but two ways, 持続可能な社会を作る」など、授業を踏まえての単語も目立ち、単語の質の変化も見られた。

以上のように非常に限られた期間で、データ数も少ない中での比較にはなるが、実践を通した生徒の前向きな変化が見られた。

北大の支援で始まったザンビア大での人獣共通感染症プロジェクトを学ぶ。それを通して国際協力の意味を改めて考える。



12

国際協力とは

国際協力とは何か、付箋を使いアイデア出しをする。国際協力とは何かと考える気づきとする。

個人 → グループ

→ クラスごと

→ 全体



(図 1 : 授業実践図)

表 1：授業実践前と授業実践後のマインドマップの数値比較



考察1:
1人平均約1.6個
増加

考察2:
14人全員では23
個増加

縦軸:単語数 横軸:生徒名a~n 14名

5 課題

1点目に研究期間の短さ（9月5日～11月14日）である。長期間、国際理解の授業を取り入れつつ、生徒の変化を観察する必要がある。2点目に国際理解を図る尺度である。本紀要では、「国際協力とは何か」との言葉を数え比較するだけにとどまった。しかし、他の研究を見ると、質問紙調査で多様な観点から生徒の変化を観察し、統計的に分析がされている。国際理解教育の尺度の研鑽にも努めたい。3点目に授業観察で本校校長からあったフィードバックから考える。エボラ出血熱の話がどこか遠いところで起きているイメージが生徒の中にも、参観している教員の中にもあった。インフルエンザなど生徒にも身近な例を通して、他国のことを自分事としてとらえることができるとの話があった。昨年ニュースで話題になったこととはいえ、少し生徒にとって距離のある話題であったと感じる。Think globally Act locally との言葉があるように、生徒の興味関心のある身近な事柄と、世界的な問題を関連付けられる教材を研究していきたい。

ザンビア渡航前に考えた「国際理解教育とは何か」との疑問に挑戦をしようとの実践であった。もちろん初めての実践であったので、明確な答えは出せてはいない。ただ国際協力とは共に力を合わせることであり、海外派遣研修、授業研究でかすかながらに気づきを得ることができた。その気づきを大切にしながら、今後も国際理解教育の研究に励んでいく所存である。

6 参考文献

高田礼人（2012）『アフリカにおけるウイルス性人獣共通感染症の調査研究』

http://www.jst.go.jp/global/kadai/h2409_zambia.html

假屋園昭彦ほか（2008）『高校生を対象とした国際理解教育における評価規準の開発的研究 — 鹿児島純心女子高校版国際理解 授業評価規準尺度の作成 —』

陣野俊彦 (2018) 『JICA教師海外研修 授業実践報告書』

外務省 『SDGsを広めたい・教えたい方のための「虎の巻」』

http://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/